

【弱いロボット】の思考

以前、日本科学未来館で開催された「弱いロボット展」を見学に行ったことがあります。

「弱いロボット」は、自分の中にすべての機能を抱え込むのではなく、半ば周囲にゆだねてしまうのです。すなわち常に他者の存在を予定し人間が手助けすることで、新たな価値が生まれることを目指したデザインです。豊橋技術科学大学教授の岡田美智男さんが中心となって、この新たなデザインを開発しました。

例えば、「ゴミ箱ロボット」というものがあります。このロボットは、ゴミを認識すると、人のいる方にヨタヨタとすり寄っていき、人の近くまで来るとペコっとおじぎをします。

そうすると、人は「ゴミを拾ってほしいのかな？」と察して、つい拾ってあげるので。すると、まるでお礼をしているかのように、もう一度ペコリとお辞儀をします。

また「アイ・ボーンズ」というロボットもあります。これは、もじもじしながら、恐る恐る手を出したり、引っ込めたりしながら、ティッシュを手渡そうとするのです。そして、見るに見かねて近くの人がティッシュを受け取ってあげると、小さくお辞儀を返してくれるのです。

考えてみると、人間の赤ちゃんも一人では何もできない弱い存在ですが、「泣く」という手段によって、おなかがすけばミルクを手に入れ、おむつが気持ち悪くなれば交換してもらうことができます。自分でできなくても、他者のアシストをうまく引き出すことで、結果として目的を達成することができるのです。

私たち人間は、単体で完結しているわけではなく、むしろ周囲の環境との相互関係の中で一つのシステムをつくっていると考えられます。

「弱さ」を内に隠さずさらけ出すことは、そこに関わりの余白が生まれることであり、さらにお互いの不完全さを補い強みを引き出し合える関係性を生み出すともいえます。

私は、教育の役割も同じように考えられると思っています。つまり、一人で何でもやってしまうのではなく、欠点や弱さを補い合うネットワークを築く力を子どもたちに身に付けることが、これからの社会ではより求められるということです。この支え合いのネットワークは、強さとしなやかさを生み出し、困難を乗り越える力へと進化していくと信じています。

まずは、教師や大人がモデルとなって、自分の弱さや欠点を謙虚に受け入れ、勇気をもって子どもたちに開示していく姿勢も必要になるのではないのでしょうか？